

協業の経済学的考察

山本 二三丸

まえがき

- 一 協業の基本的意味
 - 二 協業における人間的労働の質的变化
 - 三 協業による労働生産力の増進
 - 四 人間的労働の独自の形態としての協業
 - 五 資本主義的生産方法としての協業
 - 六 資本主義的協業の特徴
 - 七 協業における指揮・監督の問題
 - 八 社会主義的生産形態としての協業
- まとめ

まえがき

だれでもマルクス『資本論』第一巻に目を通したことがあるひとは、そのうちの「相対的剰余価値の生産」と題された第四篇が、第一〇章「相対的剰余価値の概念」にはじまって、第二一章「協業」、第二二章「分業とマニユファクチュア」、第二三章「機械と大工業」という順序で、すべて四つの章から成っているものだということは、よく知

っています。また、第一章でとりあげられている協業が、相対的剰余価値の生産のために資本が作りだした特定の、歴史的な資本主義的生産方法の一つであることも、右の四つの章の並べ方を見れば、容易に推察されるところといえます。そして、第一章について、その内容を読んでもみますと、そこに述べられていることは、それほど難解なところはなく、いずれも事理明白なように思われます。ですから、私たちは、この第一章を読み終わって、そこに書かれていることはたいへんよくわかった、そこにあるのは資本主義的生産方法の最初の歴史的形態である協業についての簡単な説明である、といって、つぎの第二章にすすむのがふつうです。第一章を読んでこういう受けとり方をするのは、けっして間違いではなくて、正しいものだといわなくてはならないのですが、私は、ここには私たちがもう一度よく考えてみなければならぬ問題——というほどではなくて、ひとつの要点、といったほうがよいかもしれません——がある、と考えます。というのは、ここに述べられていることは、すべて資本主義的生産方法としての協業にかんするものであって、そこに挙げられている協業はほかの社会とは関係のないものだとすまずことができるであろうか、ということ、私たちは考えてみる必要があるからです。この第一章に限ったことではありませんが、とくに『資本論』の中で述べられている理論的命題というものは、その場かぎりの簡単なひとつふたつの意味をもっているものはほとんどなく、いつでも、多くの意味をもつ側面を少なからずもっているばかりでなく、それはまた、ほかの理論的命題と切っても切れない関連をもっていて、お互いに切り離すことができないようになってきます。『資本論』というよう大きな大きな一つの理論体系を述べている著作については、どんな簡単な理論的命題も、また、どんな経済学的概念も、簡単な国語的解釈ですまされるものはありません。やはり、それらがどれだけ豊富な内容をもっているかということ、いいかえれば、ほかのいろいろの理論的命題なり概念なりと、どのような関連をも

っているかということ、つまり、それがそのうちにもっている豊富な多面的な内容をよくとらえて、そうしたいいろいろな側面をただしく関連づけることによって、いわば諸関連の総体として、それをしっかりとらえること——このことがいちばん大切なことで、そうした諸関連の総体として把握することができたとき、私たちは、そのときはじめて、その命題なり概念なりを、ただしく理解する (verstehen) ことができた、と言えるのです。だんだん理解が深まるという言葉がよくつかわれますが、それは、問題になっている事柄について、その豊富な諸側面をだんだん正確にとらえられるようになり、重要な諸関連をつぎつぎにとらえて正しく諸関連の総体としてその事柄を把握することができるようになってゆくこと、つまり、正しい認識に近づいてゆくことを指しているのだと思います。

協業という概念についても、右に述べたことはそのままではまるように、私は考えます。つまり、協業をたんに資本主義的生産方法としてだけとらえてすますのではなくて、もっと広い視野に立って、協業がもっているいろいろな側面を考え、その関連するところを正確にとらえて、豊富な全体としての協業というものを理解することができ、またそのなように理解しなければならぬのではないかと、私は考えるものです。

右のような考え方をもって、第一章に目を通してみると、そこにはやはり、いろいろな重要な意味をもつ諸側面がよく示されているように考えられます。ただ、この第一章は、前にも述べたように、資本にとって「相対的剰余価値の生産」のひとつの方法としてとりあげられていて、その点を中心として説明が展開されているので、資本主義的生産方法という性格をとりのぞいたときの協業のもっているいろいろの諸側面というものは、まとまって、それとわかるようには展開されていません。それらの諸側面を見出し、それらの意味するところを、その十分な広がりに関連において明らかにすることは、私たち読者のなすべき仕事となっている、ということができません。

右のような考え方にもとづいて、私は、第一章の内容を、私なりに、諸関連の総体として把握するという試みをも、この小論でおこなうことにしたものです。そうした見方とその見方の順序というものははじめにかかげた目次に示されています。

私は、『資本論』については、どんな小さな理論的命題も、また日常簡単に使われているあたりまえの概念も、こうした諸関連の総体であると考えて、それらのもっている豊富な諸側面、諸関連をただしく順序立てて把握することが決定的に大切なことだと思っていますので、この小論は、そうしたとらえ方のひとつの例ともなっているとさえ言えます。しかし、その例解がはたして妥当なものかどうかは、読者諸君の判断に委ねるしかありません。ただひとつ、こうした把握の仕方は、その理論的命題なり概念なりが、より簡単でより抽象的なものであればあるほど、ますますその諸関連の範囲が広がり、より複雑となり、諸関連の総体としての把握、つまり体系的理解は、よりいっそう困難になるものだ、ということをつけくわえておきたいと思えます。

一 協業の基本的意味

誰でも知っているところですが、協業とは co-operation (英) の訳語で、一緒に、力をあわせ (co) て働く (operate) ということ、つづめていえば、協働ということとす。ところが、日本語の業という文字は、その意味が簡単ではなく、たとえば金融業とか周旋業とかいうときの業は、働くことではなくて、それを商売にしていること、あるいは職業にしていること、つまり「めしのたね」となるものを指しています。協業の業がそのような「めしのたね」とはまったく関係のないものだということは、はっきりととらえておく必要があります。本来経済学で理論を問題にしていると

きには、業という文字は、働き、つまり労働を指しているものです。そのいちばん良い例は、分業という言葉です。これは、まさしく労働の分割 (division of labour) のことであって、むかしは、この外来語を分勞と訳していたことがあります。ですから、たとえば、労働の二重性が問題であるとき、具体的労働として裁縫とか織物とかをあげていう場合に、これを裁縫業とか織物業とかいうように訳出すると、読者はどうしてもこれらの業を職業と解するように誘われがちです。ですから、この場合には、はっきりと裁縫労働とか織物労働と訳したほうが、ずっと適当だと思われます。

そこで、まず協業とは、多数の働き手が協力して同じ仕事について働くことである、ということがわかります。マルクスは、第一章のはじめで、「相対的剰余価値の生産」のための最初の資本主義的生産方法としての協業を説明するために、まず、

「すでに見たように、資本主義的生産が実際にはじめて始まるのは、同じ個別資本がかなり多数の労働者を同時に働かせるようになり、したがってその労働過程が規模を拡張して量的にかなり大きい規模で生産物を供給するようになったときのことである」

と述べて、協業の意味をつぎのように説明しています。

「かなり多数の労働者が、同じときに、同じ空間で、(または同じ労働場所で、と言ってもよい)、同じ種類の商品の生産のために、同じ資本家の指揮のもとで働くということは、歴史的にも概念的にも資本主義的生産の出発点をなしている」(マルクス・エンゲルス全集、第二三巻、邦訳大月版、四二三ページ)。

ここで説明されているのは、もちろん、一般的な意味での協業、つまり協働というものではなくて、資本主義的生

産方法としての協業であることは、「同じ資本家の指揮のもとで」という文句と、「商品の生産のために」という文句を見ただけで、よくわかります。

ところで、マルクスは、右の説明をかけたところで、この資本主義的協業を従来生産方法である個別労働者による同職組合的手工業と比較して、その多数の労働者の協働がどのような新しい性格をもつものとなるかということ、労働力と生産手段との二つの面から明らかにしたあとで、にわかに向を変えて、資本主義的生産方法としての協業ではなく、一般的な意味での協業をとりあげて、これをつぎのように定義しています。

「同じ生産過程で、または同じではないが関連のあるいくつかの生産過程で、多くの人々が計画的にいっしょに協力して労働するという労働の形態を、協業という」（前出、四二七ページ）。

「ごらんのように、ここには、「資本家」もなければ「商品生産」もなく、ただ、「多くの人々」という言葉があるだけです。

マルクスが、ここで、なぜ、資本主義的という規定をとりのぞいて、一般的な意味での協業をとりあげることになっているか、ということは、なかなか興味ある、重要な問題であると、私は考えますが、それには、つぎのような理由があつてのことと推察されます。その第一は、右の定義を述べたあとマルクスがずっとひきつづいて説明しているのは、協業がどんなに労働の生産力を高めるかということであつて、そこで挙げられている数々の事例は一つのこらず資本主義的生産方法とは直接にかかわりのないもの、未発達の段階にある社会でもひろく行なわれてきたもの、つまり資本主義社会にかかわりなく、ひとしくすべての人間社会で人間が、動物とちがって、人間だけがなしうるひとつの労働形態として実行してきたところの、協働であります。ですから、これらの事例について、労働の生産力の増進

を説明するときには、その生産力の増進が、資本によって生ずるもの、もしくは資本そのものがそれ自身のなかにも
っているものといったこと——あとで説明されているところの、仮象など——がまったく根柢のないものだとこのこ
とを明確にして、この労働の生産力の増進はひとえに多数の労働力の担い手たちの協力的労働そのものが生みだすも
のだけということをし、ここでしっかりと説明しておくことが肝要であるわけです。

第二には、右のようにして、多数の労働力の担い手たち自身の協働そのものが高い生産力を生み出すものであるこ
とを動かしえないように説明しおえたところで、はじめて、つぎには、その協働が資本によって資本の価値増殖のた
めに資本家のもとで行なわれるようになる、右の本質がどのように歪められて現われることになるかということをし
明らかにすることができまし、そこではじめてはっきりとその仮象が説明されることとなります。

私は、マルクスが右のような考え方をとって、ここではさしあたり一般的な意味の協働についてよく——理論的に
みても、歴史的にみても——説明をし、とくに一般的意味での協働そのものがどんなに偉大な能力をそのうちに秘め
ていて、すぐれた労働の生産力を生みだすものかということをし、ここでははっきりと説明しているものと、理解していま
す。このことは、こうした一般的な意味での協業についての説明のあとで、今度は資本主義的生産方法としての協
業、いかにえれば資本主義的形態をまとった場合の協業がどういう特徴をあらたにそなえることになるかということ
の究明に移っているということによっても、まちがひなく裏付けされているといえます。

—私が、はじめに目次にかかげた二、三、四の三項目は、いずれも右のような一般的な意味での協業の本質的特徴をと
りあげたものです。そして、そのあとで、五、六、七の各項目で、資本主義的形態の協業の特徴といったものを取り
あげて論究するという形になっているのは、右に述べた考え方に則したものでありますが、このことは、読者諸君も

容易にお気づきのことと思います。

二 協業における人間的労働の質的变化

第一章の最初のバラグラフで多数の労働者の同時的作業としての協業が資本主義的生産方法の出発点であることを述べたあと、マルクスは、この最初の歴史的形態である協業と同職組合的手工業との区別は、ただ同じ資本によって働かされる労働者の数がより大きいという点にあるだけだと述べたあとで、つぎのバラグラフでは、実はこういうところに大きな違いがあるのだということを、明らかにしています。

「とはいえ、ある限界のなかでは、ある変化が生ずる。価値に対象化される労働は、社会的平均的質の労働であり、したがって平均的労働力の発現である。ところが、平均量というものは、つねにただ同種類の多数の違った個別量の平均として存在するだけである。どの産業部門でも、個別労働者、ペーターやパウルは、多かれ少なかれ平均労働者とは違っている。この個別的偏差は数学では『誤差』と呼ばれるものであるが、それはいくらか多数の労働者をひとまとめに見れば、相殺されなくなってしまう。有名な脆弁家で追従者のエドマンド・パークは、彼が借地農業者としての実際経験から知るところでは、五人の農僕というような『小さな一組について見ても』すでに労働のいっさいの個人的な相違はなくなってしまう、イギリスの壮年期の農僕の任意の五人をひとまとめに見れば、他の任意の五人のイギリスの農僕と比べて同じ時間ではまったく同じだけの労働を行なう、とさえ言っている。それはとにかくとして、同時に働かされる比較的多数の労働者の総労働日とその労働者数で割ったものが、それ自体として、社会的平均的労働の一日分であるということは、明らかである」（前出、四二四ページ）。

そこで、マルクスは、一二人の同時に働かされる労働者を例にとつて、彼らが二人ずつ小親方のもとで働かされる場合を考えると、

「各個の親方が同じ価値量を生産するかどうか、したがって一般的剰余価値率を実現するかどうかは、偶然となる。そこには個別的な偏差が生ずるのである。かりに、ある労働者が、ある商品の生産に、社会的に必要であるよりも非常に多くの時間を費やすとすれば、つまり彼にとって個別的に必要な労働時間が社会的に必要であるよりも非常に多くの時間を費やすとすれば、つまり彼にとつて個別的に必要な労働時間が社会的に必要な労働時間または平均的労働時間とひどく違っているとすれば、彼の労働は平均的労働とは認められないであろうし、彼の労働力は平均労働力とは認められないであろう。それはまったく売れないか、または労働力の平均価値よりも安くしか売れないであろう」(前出、四二五ページ)

ということにならざるをえないということがわかる、と説明して、ここからつぎの結論をひきだしています。

「だから、価値増殖一般の法則は、個々の生産者にとつては、彼が資本家として生産し多数の労働者を同時に充用し、したがってはじめから社会的平均的労働を動かすようになったときに、はじめて完全に実現されるのである(前出、四二五ページ)。

ここに引用した三つの叙述は、第一章の初めから三番目のかかなり長いパラグラフについて、その最初の部分と中ほどの部分と、そして最後の部分とからとつてきたものですが、これら三つを通して、マルクスはきわめて重要な意義のある、新しい観点を打ち出しているように考えられます。というのは、労働力の担い手である労働者は、それぞれその精神的能力も肉体的能力も異にしており、またその労働力の支出において労働の強度も熟練もけつして等しい

ものではありえないが、しかし、多数の労働者が同時に同じ場所で協働するときには、それらの個人的労働力の支出において、いずれも社会的平均的労働として実現されるようになるものだ、ということです。各異なった個別的性質をもつ個別的労働力の支出である個人的な人間の労働は、個々別々に流動させられたものであるときには、それぞれ異なった質の人間の労働として実現されますが、それらが協働の中におかれるときには、いずれも社会的平均的質の労働として自らを実現させることになるというこの法則、つまり、協業における人間の労働の質的变化というものは、きわめて重要な意義をもっています。以下、二点についてその意義を説明してみたいと思います。

第一。理論的にみてそれが重要な意義をもっているということですが、それは、価値規定に関してのことです。誰でも知っているように、『資本論』第一巻第一章第一節でまず価値の実体が明らかにされたところで、つぎに価値の大きさの規定が説明されています。そこでは、「商品世界の諸価値となって現われる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成っている」のに、なぜ、「ここでは一つの同じ人間労働力として妥当する」ものとなるかということが論究されて、この問題は、つぎのようにして解決されています。

「これらの個別的労働力のおおのは、それが社会的平均的労働力という性格をもち、そのような社会的平均的労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間労働力なのである」（前出、五三ページ、傍点―山本）。

ここでは、価値の実体としての抽象的人間の労働は、同じ質の価値として商品に対象化するためには、同じ質の人間の労働でなければならぬこと、しかし、各個別的な人間労働力そのものは千差万別であってそのたんなる流動としての人間の労働は、そのままではとうてい等しい質のものとして商品価値に対象化しえないこと、そして、結局、

それらの人間労働力がその発現においてまったく同じものとしてあらわれること、力そのものではなくして力の発現において同じものとなること、つまり同じ一商品を生産するのに他と同じ労働時間でこれをつくることができたときに、それによってはじめて、客観的または社会的に同じ質の人間の労働として妥当するものとなる、——ということが懇切に説明されています。簡単にいえば、各異なった個別的労働力の流動である個別的人間の労働は、社会的必要労働時間で一商品を生産しえたときに、そのかぎりで同じ質の人間の労働として商品価値に対象化することができ、というわけです。

ところが、ここ第一章では、多くの個別的労働力は、協業の中で流動させられるときには、おのずから社会的平均的労働という質をもち、そういう社会的平均的質の労働として自らを実現するものであることが、明らかにされています。つまり、第一巻第一章第一節の価値規定の内容は、ここ第一章では、商品への対象化という、いわば回り道を経ないで、人間的労働力の流動そのもの、人間的労働そのものが、個別的性質を脱して社会的平均的質のものとして実現されるものとなる、ということが解明されているわけです。さきほど引用したマルクスの最後の文章は、このことを別様に表現したものと考えることができます。

第二。共産主義社会の高い段階においてはすべての労働力の担い手は全面的に発達した精神的能力と肉体的能力との調和のとれた担い手であるとされていますが、それ以前の歴史的社會では、とりわけ資本主義社會では、各労働者の担っている人間労働力はどうしても一面的なものとならざるをえませんし、また資本家による苛酷な労働条件のもとの搾取をうけて、その労働力は傷けられ、あるいはまた不具化を免れないことが多いことは、周知のところです。しかし、このように一面的な発達をとげた労働力でも、また、傷けられ不具化をよぎなくされた人間労働

力でも、これを多数の労働者の協働の中で、それ相応の適当な位置・役割が与えられて、自主的・合理的な流動が行なわれるときには、りっぱに社会的平均的質の労働として自分を実現することが保証されることになるものだ、ということを、私たちはよくよく考慮することが肝要と考えます。資本主義社会では、このような一面的な、もしくは欠格の労働力の担い手は、買い手である資本家から、あれこれケチをつけられて労賃を切り下げられ、一面的な苛酷な労働を強いられるのがふつうですが、将来労働者階級が社会の主人公となる社会主義社会では、労働者階級の国家の側から適当なポストを保証されることによって、りっぱな社会的平均的質の労働力の担い手として自分自身をフルに生かすことができるのであります。マルクスの叙述が、この点についての重要な示唆を与えてくれることを、私たちは見落としてはならないと考えます。

三 協業による労働生産力の増進

多数の労働者が個々別々に労働する場合を合計したものに比べて、同じ数の労働者が同時に同じ場所で協働する場合のほうが、労働の生産力が高くなることになることは、誰でもよく知っているところですが、マルクスは、そのいろいろの協業形態の具体例をあげて、丁寧にこれを説明しています。その例を簡単に列挙しますと、

イ 協業は、結合した多数の労働力でなければ発揮できない、特別の集団力を生みだします。たとえば、騎兵一中隊の攻撃力とか歩兵一連隊の防衛力のようなものは、個別の労働者の機械的な合計ではつくりだせない、社会的な潜在力の発揮をあらわしています。

ロ 多数の労働者が同時に同じところで作業するというだけで、その社会的接触そのものが、労働する人々の間に

競争心や活力の独特の刺激を生みだし、それによって、各人の個別的作業能力が高められます。

ハ たとえば、煉瓦積み工が煉瓦を足場の下から頂上まで運ぶ場合に、たくさんの手で一つの列をつくってその間を煉瓦が送られてゆくようにするとか、一つの建物をつくるのにいくつもの違った方面から同時に着工するとかいう場合、結合労働はより大きな生産力を生みだします。

ニ たとえば、一群の羊の毛を刈るとか、ある広さの穀物畑の麦を刈り取って収穫するとかいう場合には、作業がある一定の時期に始まってある一定の時期に終わらなければならず、決定的な瞬間に必要な労働量を投入しなければならぬ恐れがあります。このときには、どうしても協業に頼らざるをえないのです。

ホ 協業でなければできない作業——土地の開拓、築堤、灌漑、運河・道路・鉄道の建設、等々。

ヘ 共同的使用による生産手段——建物、倉庫、容器、用具、装置など——の節約。協業における労働者の密集、諸種の労働過程の近接、生産手段の集中による、多額の空費の節約。

以上のようないろいろの事例をあげたところで、最後にまとめて、マルクスは、つぎのように述べています。

「個々別々のいくつもの労働日の総計と、それと同じ大きさの一つの結合労働日とを比べれば、後者はより大量の使用価値を生産し、したがって一定の有用効果の生産のために必要な労働時間を減少させる。与えられた場合に結合労働日がこの高められた生産力を受け取るのは、それが労働の機械的潜勢力を高めるからであろうと、労働の空間的作用範囲を拡大するからであろうと、生産規模に比べて空間的生産場面を狭めるからであろうと、決定的な瞬間に多くの労働をわずかな時間に流動させるからであろうと、個々人の競争心を刺激して活力を緊張させるからであろうと、多くの人々の同種の作業に連続性と多面性とを押し印するからであろうと、いろいろな作業を同時に行なうからで

あろうと、生産手段を共同使用によって節約するからであろうと、個々人の労働に社会的平均的労働の性格を与えるからであろうと、どんな事情のもとでも、結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力なのである。この生産力は協業そのものから生ずる。他人との計画的な協働のなかでは、労働者は彼の個体的な限界を脱け出て彼の種属能力を発揮するのである」（前出、四三二ページ、傍点―山本）。

ごらんのように、マルクスは、これに先きだつて、協働、すなわち結合労働日というものが、個々別々の労働日の合計にくらべてはるかに高い生産力を生みだすものであることを、いろいろの側面から説明しておいたのをまとめ、ここでもう一度、その諸側面を改めて簡潔に列挙して、この協業、すなわち結合労働日の生産力の増大を力説しています。ここで、私たちがとくに留意しておく必要があるのは、このようにして協業がつくりだす高い生産力は、多数の労働力の担い手の結合した社会的労働そのものが生みだしたものの、端的にいえば、社会的結合労働そのものにしてはじめてつくりださうる生産力である、ということなのです。ここで労働者といわれているのは、もちろん、賃銀労働者に限ったことではなく、およそ労働力の担い手であつてその労働力を支出させて結合労働の一分子を担っているものであれば、どの労働者にでもあてはまるものです。私が、右の点を強調するのは、資本主義的生産のもとで、協業に従事する労働者が賃銀労働者になると、その場合には、右のような協業の生みだす高い生産力は、資本そのものが本来そのうちに有している生産力であるかのような仮象が生じ、それが資本家のみならず、賃銀労働者をもすつかりとりこにしてしまふ、ということが必然的に生ずるからであります。この仮象については、本稿の「五」でまたとりあげることにしたいと思います。

四 人間的労働の独自の形態としての協業

さきの「三」の最後で引用したマルクスの叙述のうちで、私がとくに傍点をつけた終わりの文章によく注意していただきたいと思えます。マルクスは、人間というものは、「他人との計画的な協働」のなかで、つまり、多数の労働力の担い手が計画的に協力して労働するということによって、はじめて、彼の個人として限られた狭い労働の生産力から脱却して、人間が「種属能力」としてもつ高い労働の生産力を發揮するものだ、と述べています。これは、人間の労働というものは、本来協働という独自の形態をとるべきもので、個別的労働ではまだ人間の労働としては本質的条件をそなえているものではない、ということを示しているものと考えられます。

人間独自の労働、つまり動物の労働との本質的な違いについては、マルクスは、すでに『資本論』のなかで、第一巻第五章「労働過程と価値増殖過程」の第一節「労働過程」のはじめで、つぎのように指摘しています。

「われわれは、ただ人間にだけそなわるものとしての形態にある労働を想定する。くもは、織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂はその蠟房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もともと最悪の建築師でさえも最良の蜜蜂にまさっているというものは、建築師は蜜房を蠟房に築く前にすでに頭の中で築いているからである。労働過程の終わりに、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた、つまり観念的にはすでに存在している結果が出てくるのである。労働者は、自然的なものの形態変化をひきおこすだけではない。彼は、自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現するのである」(前出、二三四ページ)。

ここでは、人間的労働の特色は、もっぱら、人間だけがもっており、しかも労働そのものによって歴史的に発達し

てきたところの、精神的能力の点におかれています。しかし、これは、まだ個々の労働力の担い手の、個人としての能力の問題であって、人間が種属としてはじめて有する、そしてまた人類だけが發揮することのできる能力については言われていなかったものです。ですから、協業というのは、人間が、種属としてはじめて有することのできる独自の労働形態である、ということができます。マルクスは、よく、「類としての人間」という言葉をつかいましたが、これを経済学の面から見ると、協働の中におかれたとき、その労働力の担い手は、はじめて「類としての人間」を体現している、ともいえましよう。この「種属能力の發揮」ということは、将来、社会主義社会においては決定的な意義をもつものとならなければならぬと考えられるのですが、これについては、後段の「八」でふれることにしたいと思います。

五 資本主義的生産方法としての協業

「多数の労働者が、同じときに、同じ場所で、同じ種類の商品の生産のために、同じ資本家の指揮のもとで働く」ということ、つまり単純な協業が「歴史的にも概念的にも」資本主義的生産の出発点となっているという、マルクスの言葉はさきに引用したところ（本誌、三一ページ）ですが、この「歴史的にも概念的にも」という点は、はっきりとらえておく必要があります。

まず、「歴史的」な意味での出発点というものは、当然にまた、「概念的」な意味での出発点ともなっていないければならない、ということをよく理解していることが肝要です。なぜ、歴史的に出発点となったかといえば、それは剰余価値獲得を唯一の目的とも動機ともしている資本が、その剰余価値を賃銀労働者から搾取するためには、しかも資

本家が資本家として生活してゆくために必要にして十分な剰余価値を搾取するためには、どうしても一人、二人の賃銀労働者を雇うだけではとうてい足りないからですし、必然的に多数の労働者を雇って働かさなければならぬからです。資本主義的生産が始まる以前にあったのは同職組合的手工業で、それにたずさわる手工的労働者の生産力はきわめて低く、たとえ一労働日のうちに剰余労働時間がふくまれているとしても、たとえば一労働日一二時間のうち、労働者自身の生活に必要な価値を生産するだけの必要労働時間が九労働時間で、剰余労働時間はわずかに三労働時間にすぎないという具合になっています。ですから、いま資本家が一人の労働者を雇って、その労働力の価値をそのまま支払うものとしますと、労働者は一日働いてその手に九労働時間分の価値がはいり、資本家の手にはいる剰余価値は、わずかに三労働時間分ということになります。これでは、資本家は、労働者に比べてその三分の一の生活手段しか得られません。ですから、どうしても労働者の数をふやして、獲得する剰余価値をふやさなければ、資本家として生きてゆくことはできないのです。右の例でみますと、労働者数を三人にしたときに、獲得する剰余価値額は九労働時間分となって、ようやく労働者の得るところと同じになります。こういう状態のもとでは、その資本家も、労働者と同じように働かなければならないのであって、こうした彼自身労働者と同じように働いている雇主「資本家」というものは、今日でも、多くの中小企業、いわゆる町工場によく見られるところですが、右の例では、資本家が資本家として暮してゆくのに必要な剰余価値量を、労働力の価値の二倍、つまり一八労働時間分としますと、彼は、どうしても六人の賃銀労働者を雇ってゆかなければならないことになります。

要するに、資本が資本として成り立つためには、言いかえますと、資本家が資本家としての存在を維持するために、最低限度の剰余価値量獲得が必要不可欠で、その必要な剰余価値量を搾取するためには、どうしても多数の賃銀

労働者を雇って働かさなければならぬということがあるからこそ、協業が、資本主義的生産にとって、「歴史的にも概念的にも」その出発点とならなければならぬ、ということになるわけです。

協業は資本主義的生産方法であるとしても、私たちは、たとえば、ピラミッドの建設のように、太古にも大規模工事がすべてきわめて多数の労働者の協働によってはじめて成しとげられたものだということを知っています。では、これらの、資本主義的生産方法ではない協業というものは、どのように区別して説明されなければならないのでしょうか？ マルクスは、これについて、つぎのように説明しています。

「人類の文化の発端で、狩猟民族のあいだで、またおそらくインドの共同体の農業で、支配的に行なわれているのが見られるような、労働過程での協業は、一面では生産条件の共有にもとづいており、他面では個々の蜜蜂が巣から離れていないように個々の個人が種族や共同体の臍帯からまだ離れていないことにもとづいている。この二つのことは、このような協業を資本主義的協業から区別する。大規模な協業の応用は古代世界や中世や近代植民地にもまばらに現われているが、これは直接的な支配隷属関係に、たいていは奴隷制にもとづいている。これに反して、資本主義的形態は、はじめから、自分の労働力を資本に売る自由な賃銀労働者を前提としている。とはいえ、歴史的には、それは、農民経営にたいして、また同職組合的形態をそなえているかどうかにかかわらずなく独立手工業経営にたいして、対立して発展する。これらのものについて資本主義的協業が協業の一つの特別な歴史的形態として現われるのではなく、協業そのものが、資本主義的生産過程に特有な、そしてこの生産過程を独自のものとして区別する歴史的な形態として現われるのである」（前出、四三八―四三九ページ）。

見られるように、ここには、おおまかにいって、二つのことが明らかにされています。

その一つは、資本主義以前にあった古い形の協業についての説明で、それには二つの異なった性質の協業があることが指摘されています。まず挙げられているのは、「人類の文化の発端」にあったもの、「狩猟民族」や「インドの共同体」に見られるようなもので、それらは「生産条件の共有」と「各個人の種族や共同体のへその緒への結びつき」にもとづいているものです。なぜ、そういうところで協業が必然的に行なわれたかといえば、それは、これらの人類発展のきわめて低い段階では、労働の生産力がひじょうに低く、したがって、協業による労働生産力の引きあげによって必要生産物の最低量を確保しなければならない、という事情があったからです。これらの段階では、協業は基本的な社会的労働形態となっていますが、それは、労働の生産力がきわめて低いことによって規定されたものだ、ということができます。もう一つの協業の古代的形態は、その社会の正常な、または一般的な社会的労働形態ではなくて、むしろ「まばらに」、「応用として」大規模工事に適用されたものであって、それらは、いずれも「直接的な支配隷属関係」に、たいていは奴隷制にもとづいたものです。以上の二種類の太古的・古典的形態の協業にたいして、マルクスは、資本主義的協業が、「自由な」賃銀労働者の存在を前提とするものだ、ということを描いています。

いまひとつは、資本主義的協業は、歴史的には、独立の農民経営や独立手工業経営が支配しているところに、これらに対立して現われたもので、それは、資本主義的生産過程そのものの独自の、特有のものであって、資本主義的生産過程を歴史的に特徴づけるものとなっている、ということですから。この場合には、協業は、さきの太古的形態のそれに比べて、まったく違った意味をもっています。さきには、社会的な労働生産力の極度の低位が協業形態を必然的なものにしたのですが、ここでは、労働の生産力をいやが上にも高めるための不可避的な社会的労働形態として、協業が必然的なものとなっているのです。この点から見ると、マルクスが、資本主義的協業について、これを「資本主

義的生産過程を独自のものとして区別する歴史的形態として現われる」と述べていることは、きわめて重要な内容をそのうちにふくんでいるものと考えられます。右の叙述の中には、つぎの三点について、私たちが考慮するよう導いてくれる糸口が見いだされるのではないかと私は考えるものです。

その第一点は、資本が作りだした独自の生産方法である協業、つまり多数の労働者の協働が生産力を高めるための社会的な労働形態であるとすれば、それによって高められた生産力そのものが、桎梏となった古い生産関係をうちやぶって、より高い、新たな社会がそこに向ちたてられなければならないというときには、この多数の労働者の協働こそがその社会の基礎におかれなければならない、ということが導き出される、ということです。

その第二点は、右の第一点に関連して、つぎの、より高い歴史的社会は当然に、協働する労働者階級が主体となつて、そこには、自分では労働しないで他人の不払労働に寄生する「不用者」¹¹資本家の階級はまったく存在する余地がなくなるといふこと、言いかえますと、階級対立のもとでの協業が、階級対立の揚棄された協業にとつて代わられるといふことは、資本主義社会が階級対立にもとづく歴史的社会的最後に位置するものだといふことを意味するものである、ということ事です。

さらに第三点としては、私たちは、さきに本稿の「三」の中で引用したマルクスのつぎの言葉を、このさい、想起する必要があります。

「他人との計画的な協働のなかでは、労働者は彼の個体的な限界を脱け出て彼の種属能力を發揮するのである」
(本誌、四〇ページ参照)。

資本が最大限の剰余価値を労働者から搾取するために不可避的に採用せざるをえなかった資本主義的協業にして、

しかも労働者をしてその種属能力を發揮させることが可能であるとしますと、資本主義的生産關係を覆えして資本の抑圧・搾取をきれいさっぱり一掃して労働力の担い手たち自身が社会の主人公となり、彼ら自身が主体として自由に計画的に協業を組織して自分たちの手で運営するようになれば、彼らの種属能力の發揮は、資本主義的生産のもとでのそれとは比べものにならないほど、はるかに高度の、まったく新しい質の展開を見せることになるのは、必定です。なぜならば、その協働を組織する各労働者の担っている人間労働力そのものが、資本主義的搾取と抑圧のもとでの一面化・不具化をはねとばして、まったく新しい質のものに、全面的な發達をとげうるものに、文字どおり生まれ変わっているからであります。

以上のことをあわせて考えますと、「資本主義的生産過程を独自のものとして區別する歴史的形態」としての協業という、マルクスの言葉は、私たちが、その関連するところを広く、深くつきつめてゆくならば、それがきわめて含蓄に富んだ大切な指摘であることを知らなければならないと、私は考えます。

ところで、この「五」の表題にかかげた「資本主義的生産方法としての協業」という言葉については、やはり、そこに一つの問題があることを指摘しておきたいと思ひます。それは、ここでの「協業」という言葉の意味する内容にかかわるものです。

この協業という言葉について、どこに問題があるかということを示すために、私は、マルクスの盟友エンゲルスの文章をつぎにかかげることにします。これは、エンゲルスの不朽の名著『反デューリング論』からの引用ですが、ここでエンゲルスは、私たちがいまとりあげている『資本論』第一巻第四篇の内容を、彼一流の表現でやさしく説明してくれています。少しく長いものですが、右に見た「資本主義的生産過程に特有な、そしてこの生産過程を独自の

のとして區別する歴史的な形態」としての協業ということを平易に説明しているところをふくめて、つぎにかかげることにします。

「資本主義的生産以前には、すなわち中世には、労働する者が自分の生産手段を私有することに基礎をおく小経営が、ひろく存在していた。自由なまたは隷農的な小農民の農耕、都市の手工業がそれである。労働手段——土地、農具、仕事場、手工用道具——は、個々人の労働手段であり、もっぱら個人的な使用を以てしたものであった。だから、必然的にちっぽけな、矮小な、制限されたものであった。だが、そうであればこそ、それらはまた通例、生産者自身のものになっていた。これらの分散した、局限された生産手段を集積し拡大して、強力に作用する現代の生産の槓杆てこに変えること、これこそが、資本主義的生産様式とその担い手であるブルジョアジーとの歴史的役割であった。この両者が、一五世紀このかた歴史的に、単純協業とマニファクトリアと大工業という三つの段階を通じてこのことをなしとげたしだいを、マルクスは『資本論』第四篇で詳しく描いている」（マルクス・エンゲルス全集 第二〇巻、邦訳大月版、二七八ページ）。

問題は、最後のところに出てくる「単純協業」という言葉です。つまり、マルクスは『資本論』第一章の表題を「協業」としているのです。ですから、マルクスが第一章の冒頭で述べているような、「歴史的にも概念的にも資本主義的生産の出発点をなしている」ところの協業形態というのは、この単純協業を指しているものです。ところが、多数の労働者の協働という意味での協業は、なにも単純な協業に限ったことではなく、たとえば、多数の労働者が労働を分割して、つまり分業によって協働する場合も、りっぱに協業であります。ただし、それは、かつての手工的労働者がただ同じ資本家の指揮のもとで同じ商品の生産のために、それぞれが独立手工業者であったときと同じ労

働をめいめいがするという、単純な協働ではなくて、そこには分業という新たな要素が加わったところの、つまりより複雑な規定をもったところの、協業であるわけです。さらに、この協働が、機械という発達した労働手段を基本として多数の労働者が同時に同じ資本家のもとで働くという形になりますと、それは、さらに発展した形態の協業、またはより複雑な規定をもった協業ということになります。このように、分業という要因を加えたより複雑な協業がマニファクチュアですし、さらにその上に機械を基本とするという規定が加わった協業が、すなわち大工業であります。

ですから、マニファクチュアも大工業も、ともに協業であつて、しかも、単純協業に比べて、より発展した、またはより複雑な協業であるわけで、いずれも協業であることに変わりはなく、したがつて、これまで見てきたような協業の諸側面、または諸特徴というものは、そしてとりわけそれによる労働の生産力の増進といったようなことは、これら二つの発展した協業にも、さらによりよく、あてはまるものだ、といえます。

右のように見てきますと、問題は、協業と単純協業とのちがひということより、むしろ、マルクスが、歴史的・概念的に出発点をなしている単純協業をとりあげながら、この第一章の表題を、なぜ、ことさら「協業」としたかというに移らなければならないように考えられます。とすれば、これにたいする答へとしては、どうしてもつぎのようなことが導き出されてきます。つまり、マルクスは、この第一章で、歴史的・概念的な出発点である単純協業をまずとりあげて、それがいかに労働の生産力を増進するかということ、しかもその協働そのものもつ労働の生産力がいかに資本そのものの生産力という仮象をとつて必然的にあらわれざるをえないかということを究明しています。これらはすべて発展した協業形態であるマニファクチュアにも大工業にも、さらによりよくあてはまるもので

あり、したがってひとり単純協業だけの特徴ではなく、むしろ発展した協業形態においてより顕著にあらわれ、より大きな意義をもつてくることを考慮して、ここにあるのは単純な協業だけにかんする論究ではないということ、読者によくわからせるために、あえて、一般的な意味での協業という表題をつけたものと推察されます。簡単にいえば、第一章の表題は、より発展した協業形態を論究している第二章「分業とマニユファクチュア」と第三章「機械と大工業」とを見通して、これら二つのより複雑な協業形態にも妥当する諸規定および諸特徴を、この第一章であらかじめ、あわせて説明しておくことがより適切と考えたものと思われるのです。エンゲルスの記述の場合には、その文章そのものが明示しているように、資本主義的生産方法の歴史的発展の順序を示したものですから、たんなる協業では適当でなく、はっきりと、単純協業にはじまって、マニユファクチュアから大工業へ発展したと言わなければならぬわけです。このように見てきますと、マルクスが第一章の表題を「協業」とし、エンゲルスがその記述の中で「単純協業」という言葉を用いているのは、双方ともそれぞれ正当な根拠をもっているものであって、両者の用語が矛盾しているとか食いちがっているとかいうようなことではけっしてない、ということが明らかになると思います。

六 資本主義的協業の特徴

この「六」では、右に見たところで見られるように、ひとり単純協業だけの特徴ではなく、すべての資本主義的協業に、したがってより発展した協業形態であるマニユファクチュアにも大工業にも共通する、一般的な特徴を簡単に考察することにしたと思います。より発展した資本主義的協業形態であるマニユファクチュアや大工業は、それらな

りにそれぞれ固有の、いわば発展した、特定の特徴をそなえているのはいうまでもないところです。しかしまた、単純な協業についてその具体的な特徴を明らかにしたところは、同時に、発展した協業形態にも妥当するものでなければならぬ、と私は考えるものです。

まず、資本主義的生産方法としての、協業の一般の特徴は、この協業が資本にとって最大限の剰余価値を搾取するための唯一の生産形態であるというところから出てきています。その著しい特徴は、さまざまな面についてはつきりと現われていますが、そのなかでまず第一に挙げられなければならないのは、さきに「三」で明らかにされたところの、協業における結合労働がもっているその高い生産力が、労働力の担い手たち自身の結合した労働そのものの生産力としては現われず、反対に資本そのものが本来そのうちにもっている生産力であるというように現われること、つまり、資本に内在する生産力だという仮象ができあがって、一般に妥当するものとなる、ということです。

なぜ、右のように本質的な事柄を隠蔽する仮象が確立するか、なぜ、協業が生みだす高い生産力は、結合労働そのものの生産力であるのに、これとまったく関係のない資本そのものの本来そなえている生産力であるというように、転倒した現象形態が必然的に生まれるのか、ということについては、マルクスが、第一章のなかで、つぎのように懇切に説明してくれています（……は省略部分）。

「労働者は、自分の労働力の売り手として資本家と取引しているあいだは、自分の労働力の所有者なのであり、そして、彼が売ることができるものは、ただ彼がもっているもの、彼の個人的な個別的な労働力だけである。この関係は、一つの労働力ではなく一〇〇の労働力を買うとしても、……それによって少しも変えられるものではない。資本家は一〇〇人の労働者を協業させることなしに充用することもできる。それだから、資本家は一〇〇の独立した労働者

働力の価値を支払うのであるが、しかし百という結合労働力の代価を支払うのではない。独立の人としては、労働者たちは個々別々の人であって、彼らは同じ資本家と関係を結ぶのではあるが、お互い同士では関係を結ばないのである。彼らの協業は労働過程にはいつてからはじめて始まるのであるが、しかし労働過程では彼らはもはや自分自身のものではなくなっている。労働過程にはいつて彼らは資本に合体されている。協業者として活動有機体の手足としては、彼ら自身はただ資本の一つの特殊な存在様式でしかない。それだからこそ、労働者が社会的労働者として發揮する生産力は資本の生産力なのである。労働の社会的生産力は、労働者が一定の諸条件のもとにおかれさえすれば無償で發揮されるのであり、そして資本は彼らをこのような諸条件のもとにおくのである。労働の社会的生産力は資本にとってはなんの費用もかからないのだから、また他方この生産力は労働者の労働そのものが資本のものになるまでは労働者によって發揮されないのだから、この生産力は、資本が生来もっている生産力として、資本の内在的な生産力として現われるのである」（前出、四三六―四三七ページ）。

簡単にいえば、各個別の労働者は、彼自身の労働力がどのくらいの生産力をもっているかは、彼が個別に働いたときの経験から知っていますし、たとえば五〇人の労働者の生産力はその五〇倍ぐらいだということも見当がつかますが、しかし、その五〇人が結合労働力として發揮する生産力がその五〇倍よりはるかに高く、しかも比較を絶するほどの高い質のものであることは、まったく理解できません。しかし、その結合労働力をつくり出すのは彼ら自身ではなくして資本であり、結合労働力そのものはたんに資本が一時的にそういう形で存在しているだけのものとしてはじめてあるわけですから、彼らの結合労働力の發揮する高い生産力は、彼ら自身のうちに本来そなわったものではなくて、資本そのものが本来それ自身のうちにそなえているものだということのように受けとらざるをえないのであります。で

すから、右の例で、資本家は労働者一人の労賃の五〇倍を支払いますが、結合労働力の發揮するはるかにそれより高い生産力の成果にたいしては、資本自身のうちにある生産力の成果だと称して、これをタダでふところに入れてしまふのです。

このように、協業そのものがそれ自身のうちにもっている高い潜勢力の發揮は、資本がそれ自身のうちにそなえている固有の生産力の發現だというように、転倒して現われることになるのが、資本主義的協業の第一の顕著な一般的特徴です。

つぎにあげられるのは、自明のことですが、この協業は、資本ができるだけ大量の剰余価値、いいかえれば剰余労働を労働者から搾取するためのものだ、ということですが、そのために、肝心の結合労働は、労働力の健全な維持「再生産と發達のためのものではなくなります。加えて、さきに本稿の「三」の中で協業によって労働の生産力が高められる理由として挙げられた事例のうちの□で示された社会的接觸そのものによる「競争心や活力の独特の刺激」というもの（本誌、三八—三九ページ参照）がまったく歪められるか、もしくは害なわれてしまふ、ということになります。人間労働力の健全な維持・發達のための結合労働ではなくして、労働力の一面化および損傷ないしは破壊をもひきおこしかねない、活力を阻害する労働——これが資本主義的協業のひとつの特徴だといわなければなりません。この特徴は、協業が単純なものから複雑な、より高度のものに發展してゆくのにしたがって、ますます強化されることになっています。つまり、結合労働力の發揮する労働の生産力がいよいよ増進すればするほど、その結合労働力を構成している各個別的労働力は、いよいよますます害なわれ、より貧しくなつてゆく、ということですが、

さらに付け加えれば、単純協業は資本主義的生産様式のある特別な發展期の固定的な特徴的な形態をなすものでは

なく、いわばその初期段階に散発的に行なわれたものですが、その段階では手工的労働者は、いつでも資本のもとを離れて独立生産者としてその労働力を働かすことができましたが、協業が本格的に展開して支配的になったそれ以後の段階、つまりマニファクチュアおよび大工業においては、労働者は資本のもとを離れては独立できず、完全に資本のもとに隷属するいわば付属物の地位におとし入れられてしまっています。労働の生産力を飛躍的に高め発展させるための協業がかえって、その労働力の担い手自身の資本のもとへの隷属を動かないものにする、——これも、資本主義的協業の著しい特徴であるといわなければならないと考えます。

なお、資本主義的協業のきわだった一般的特徴としては、指揮・監督の変質ということがあげられなければなりません。これについてはつぎの節で考察することにします。

七 協業における指揮・監督の問題

資本主義的生産方法としての協業において資本家の指揮・監督が必要不可欠なものとなることは、だれでも容易に理解できるところですが、しかし、それがどういう性質のものであるか、またはどういう特徴をもったものであるか、ということが問題になると、これにたいする答えは、簡単ではなく、また、いろいろ違った答えも出てくるようです。たいていの論者は、資本主義的協業における資本家の指揮・監督は二重的なものであるという、マルクスの言葉をそのままとって、それは、一面では多数の働き手の協働が一般的に必ず必要とする指揮であると同時に、他面では労働力搾取のための監督である、というように説明しているようです。こうした説明は、そのものとしては誤っているとは思われませんが、しかし、この説明から、たとえば、資本家の搾取のための監督という一面をとりのぞけ

ば、そこには一般的に多数の労働者の協働にとって必要な指揮という機能が残るのであって、資本主義国での資本家の指揮・監督の技術からその資本主義的搾取の一面を除去すれば、それは社会主義国にもりっぱに適用できる指揮・監督の技術になることができる、といった結論が導き出されるときには、そこにはやはり見逃すことのできない錯誤が生じることになるのではないかと思われます。そこで、私たちとしては、マルクスのこれについての説明の内容をさらにいっそう注意して読みとることが大切だと考えます。というのは、マルクスは、はじめから二重的なものだという説明をかかげているわけではないのですから。

マルクスは、まずはじめに、

「最初は、労働にたいする資本の指揮も、ただ、労働者が自分のためではなく資本家のために、したがってまた資本家のもとで労働するということの形態的な結果として現われただけだった」(前出、四三四ページ)

と述べています。つまり、多数の労働者ではなく、少数——といっても、資本家として必要な額の剰余価値がそこから汲み出されるだけの数——の労働者を雇用するときには、ただ搾取材料としての労働力の担い手がそういうものとして役立つことができるように監督すること、つまり資本家としての搾取の機能が必要とする監督・監視であった、というわけです。ここには、多数の労働者の協働そのものが必要とする指揮・監督というものは、まだなかったか、またはきわめて軽微なものにとどまっていた、といえます。ところが、充用される労働者数が増加し、協業がより大規模になるにつれて、資本の指揮は、「労働過程そのものの遂行のための必要条件」に、一つの現実の生産条件に発展してきます。そして、ここでは「生産場面での資本家の命令は、戦場での將軍の命令のようになってはならないものになるのである」と述べて、マルクスは、つぎのような説明を加えています。

「すべての比較的大規模な直接に社会的または共同的な労働は、多かれ少なかれ一つの指図を必要とするのであって、これによって個別的諸活動の調和が媒介され、生産体の独立な諸器官の運動とは違った生産体全体の運動から生ずる一般的な諸機能が果されるのである。単独なヴァイオリン演奏者は自分自身を指揮するが、一つのオーケストラは指揮者を必要とする。この指揮や監督や媒介の機能は、資本に従属する労働が協業的になれば、資本の機能になる。資本の独自の機能として、指揮の機能は独自の性格をもつことになる」（前出、四三四ページ）。

こここのくだりは、よく注意して読むことが肝要と考えます。というのは、ここにはつぎのようなことが述べられていると早や合点をするひとが少なくないからです。つまり、資本家は、一面ではオーケストラの指揮者のそれと同じ一般的な意味での指揮・監督・媒介の機能を果すものであって、同時に他面では資本家としての搾取のための指揮・監督を行なうものである、というものです。これは、つづめていえば、資本家は、一面ではオーケストラの指揮者であり、他面では搾取者としての資本家である、というものです。残念ながら、このような考え方は、短見といわざるをえません。なぜならば、資本家はそもそも始めから資本家であって、労働者を働かせるのは、彼らの能力を十分に發揮させたり發達させたりするためではまったくなく、ひとえにその労働力をとことんまで搾取するためです。使役する労働者の数が多くても少なくても、この最大限の剰余価値の搾取が唯一・最大の目的とも動機ともなっています。ですから、搾取のための指揮・監督は、一貫して唯一・不動の基本となっています。ただ、できるだけ大きな剰余価値の搾取を確実にするために、労働者数を増加させ、したがって多少とも大規模な共同的労働の形をとるようになれば、その搾取のための資本の指揮・監督には、オーケストラの指揮者の指揮に類似した、多数の働き手にたいする指揮・監督・媒介の機能という要素が必然的に加わってこなければなりません。私がここに「類似した」と言っ

たのは、オーケストラの指揮にあつては各個別的演奏者の能力を最大限に發揮させて全体として調和のとれた活動を確保するための指揮・監督・媒介がその本質となつていなければならないのに反して、資本のもとでの指揮にあつては、各個別的労働者の労働力を最大限に搾取するための、ただそのためだけの指揮・監督・媒介がその本質となつてゐる、という事情があるからです。ですから、オーケストラの指揮者の指揮と資本家の指揮との本質的な差違を明らかにするため、マルクスは、右に見たように、「資本の機能は独自の性格をもつ」ものだとして、ことさらつぎの説明をおいてゐるのです。

「まず第一に資本主義的生産過程の推進的な動機であり、規定的な目的であるのは、資本のできるだけ大きな自己増殖、すなわちできるだけ大きい剰余価値生産、したがつて資本家による労働力のできるだけ大きな搾取である。同時に従業する労働者数の増大につれて彼らの反抗も大きくなり、したがつてまたこの抵抗を抑圧するための資本の圧力も必然的に大きくなる。資本家の指揮は、社会的労働過程の性質から生じて資本家に属する一つの特別な機能であるだけではなく、同時にまた一つの社会的労働過程の搾取の機能でもあり、したがつて搾取者とその搾取材料との不可避的な敵対によつて必然的にされてゐるのである。同様に、賃銀労働者にたいして他人の所有物として対立する生産手段の規模が増大するにつれて、その適当な使用を監督することの必要も増大する。さらにまた、賃銀労働者の協業は、ただ単に、彼らを同時に充用する資本の作用である。彼らの諸機能の関連も生産的全体として彼らの統一も、彼らの外にあるのであり、彼らを集めてひとまとめにしておく資本のうちにあるのである。それゆえ、彼らの労働の関連は、觀念的には資本家の計画として、實際的には資本家の權威として、彼らの行為を自分の目的に従わせようとする他人の意志の力として、彼らに相対するのである」(前出、四三四—四三五ページ)。

ごらんのように、マルクスは、資本家の指揮は、たんなる社会的労働過程の性質から生ずる資本家の機能であるだけではなく、それは、同時に、その社会的労働過程の搾取の機能でもあり、搾取者と搾取材料との不可避的な敵対によって必然的となっているものだ、と述べています。オーケストラの場合には、指揮者も各単独の演奏者も同じオーケストラを構成する対等のメンバーであって、一方は指揮の機能を、他方はそれぞれ担当する楽器演奏の機能を担当し、相互に結びつき依存しあい信頼しあって、ひとつの美しいシンフォニーをつくりだすものとなっています。これに反して、資本主義的経営にあつては、多数の労働者は、たんなる生きた搾取材料にすぎず、人間としては待遇されることなどまったくなく、資本家と労働者の間には、抑圧する者と抑圧される者、搾取する者と搾取される者との敵対関係しかありません。ですから、同じように比較的大規模な社会的または共同的な労働にたいする指揮であるとはいっても、オーケストラの指揮者の指揮と資本主義的経営の資本家の指揮とは、その間に本質的な差違があります。同じく社会的な労働過程から必然的に生じた指揮の機能であるとはいっても、このように本質的に隔絶した二つの指揮をば同じ性質のものとして取り扱うことは、まったくの錯誤というほかないものです。右の引用の最後にある「資本家の計画」、「資本家の権威」、「他人の意志の力」という三つの言葉も、資本家が多数の労働者を人間としてではなく、ただの搾取材料として一個所に集めてとことんまで搾りつくすという、資本主義的経営の本質を端的に示したものです。右につづいて、マルクスは、

「それゆえ、資本家の指揮は内容から見れば二重的であつて、それは、指揮される生産過程そのものが、一面では生産物の生産のための社会的な労働過程であり他面では資本の価値増殖過程であるというその二重性によるものであるが、この指揮はまた形態から見れば専制的である」（前出、四三五ページ）

と述べていますが、これは、さきの説明をうけて、これを言い直したものであること、また右の労働過程と価値増殖過程とは切っても切り離しえない関係にあって、そこでは価値増殖過程がもっぱら規定的なものであること、に注意する必要があります。たとえば、価値増殖過程の一面を取り去れば、そこにどの社会にでも通用する社会的な労働過程と結びついた一般的な指揮が現出する、などといった考え方は、とうてい成り立ちえないものだ、ということ銘記しておかなければなりません。搾取材料をとことんまで搾りつくすための社会的な労働過程であるからこそ、その指揮の形態は、始めから終わりまで、文字どおり専制的であるわけです。

資本主義的生産の発展に伴って、右のいわば専制的指揮は、また、それ特有の形態を展開することになるのであって、これについて、マルクスはつぎのように説明しています。

「資本家は、彼の資本が本来の資本主義的生産の開始のためにどうしても必要な最小限度の大きさに達したとき、まず手の労働から解放されるのであるが、今度は、彼は、個々の労働者や労働者群そのものを絶えず直接に監督する機能を再び一つの特別な種類の賃銀労働者に譲り渡す。一つの軍隊が士官や下士官を必要とするように、同じ資本の指揮のもとで協働する一つの労働者集団は、労働過程で資本の名によって指揮する産業士官(支配人、managers)や産業下士官 (foremen, overlookers, contre-maitres)を必要とする。監督という労働が彼らの専有の機能に固定するのである」(前出、四三三ページ)。

ここに明示されているように、同じ資本によって協働的労働過程で搾取される賃銀労働者が多数になり、そこから汲み出される剰余価値量がかなりの額に達するようになれば、その資本家は、指揮・監督の機能を特別の種類の賃銀労働者に譲り渡すようになるのであって、これが産業士官、産業下士官と呼ばれるものです。彼らは、資本家に代わ

って労働者にたいする指揮・監督・監視の仕事を分担し、したがって生産的労働を行わず、彼らの労働にたいする賃銀は、資本家の搾取した剰余価値から支払われることとなります。その点からいっても、資本家が搾取し取得する剰余価値量は相当大きな額になっている必要があるわけです。

右のような資本家の代理人である産業士官や産業下士官の指揮・監督・監視が実際にどのような状況のもとで、どのような形で実施されているものかということは、私たちとしてははっきりと突きとめておく必要がありますが、さしいわいマルクスが、『資本論』のなかでこれについて克明な描写をあたえているので、これをつぎに引用してかかげることにします。これは、第一巻第二三章「機械と大工業」の第四節「工場」のなかに明記されているものです。

「労働手段の様な動きへの労働者の技術的従属と、男女の両性および非常にさまざまな年齢層の個人から成っている労働体の独特な構成とは、一つの兵營的な規律をつくりだすのであって、この規律は、完全な工場体制に仕上げられて、すでに前に述べた監督労働を、したがって同時に筋肉労働者と労働監督とへの、産業兵卒と産業下士官とへの、労働者の分割を、十分に発展させるのである。

工場法典のなかでは資本は自分の労働者にたいする自分の専制を、よそではブルジョアジーがあんなに愛好する分権もそれ以上に愛好する代議制もなしに、私的法律として自分勝手に定式化しているのであるが、このような工場法典は、ただ大規模な協業や共同的な労働手段ことに機械の使用につれて必要になってくる労働過程の社会的規制の資本主義的戯画でしかない。奴隸使役者の咎とがに代わって、監督の処罰帳が現われる。すべての処罰は、もちろん、罰金と減給とに帰着する。工場リユクルゴス「スパルタの伝説上の立法者」たちの立法者的明察は、彼らにとって彼らの法律にたいする違反のほうがその遵守よりもできればいっそう有利になるようにするのである」（前出、五五四―五五五ページ）

ジ、傍点—山本)。

さらにまた、マルクス・エンゲルスが活動していた産業資本主義の段階から進んで、独占—金融資本の支配する帝國主義の段階にはいると、右の産業士官や産業下士官の担う機能は、たんなる指揮・監督・監視からさらに発展して、「労働貴族」という名称をいただくものが少なからず現われて、資本家の手先として、今度は、社会的・政治的に重要な役割を担うものになります。このような、彼らの独特の機能については、マルクスのもっともすぐれた後継者であるレーニンが、その有名な労作『資本主義の最高の段階としての帝國主義』のなかの第八章「資本主義の寄生性と腐朽」において精確な分析をおこなっています。この第八章がもっている重要な意義については、レーニン自身も、この労作のはじめにかかげている「フランス語版とドイツ語版の序文」のなかの「五」においてよく説明しています。そのなかで、帝國主義列強が、たんなる「利札切り」という寄生的方法によって全世界を略奪していること、そして、それらの列強の資本輸出が、第一次大戦前の価格によるブルジョア統計によっても、年に八〇億——一〇〇億フランの収入を——そして一九二〇年当時ではもっとずっと大きい額の収入を——もたらしていることを指摘したあとで、レーニンはつぎのように述べています。

「このような巨額の超過利潤(というものは、この利潤は、資本家たちが『自国の』労働者から搾りあげている利潤以上に余分に得られるものだから)の一部で、労働者の指導者と労働貴族の上層とを買収できるのは明白である。そして『先進』諸国の資本家は、彼らを現実に買収している、——直接および間接の、公然および隠然の、種々さまざまな方法によって買収している。

ブルジョア化した労働者あるいは『労働貴族』のこの層は、その生活様式、その稼ぎ高、その全世界観の点で、ま

つたく小市民的であつて、それは第二インタナショナルの主要な支柱であり、また今日ではブルジョアジーの主要な社会的支柱（軍事的支柱ではないが）である。なぜなら、彼らは、労働運動の内部におけるブルジョアジーの、真の手先であり、資本家階級の労働者手代（Labour lieutenants of the capitalist class）であり、改良主義と排外主義の真の伝達者だからである。プロレタリアートとブルジョアジーとの内戦では、彼らは不可避免的に、しかも少くない数で、ブルジョアジーの側に立ち、『コミューン派』に反対して『ヴェルサイユ派』に味方する。

この現象の経済的根底を理解することなしには、またその政治的および社会的意義を評価することなしには、共産主義運動と来たるべき社会革命との実践的任務の解決という面で、一歩も進むことはできない」（レーニン全集、第二巻、邦訳大月版、二二二―二三三ページ、傍点レーニン）。

私たちは、協業における資本の指揮・監督ということのなかに、これだけの諸関連がふくまれていることをよく認識して、これらの事柄を正しく結びつけて把握することが肝要であると、私は考えるものです。

今日発達した資本主義国では、独占・金融資本が完全に支配していて、ほとんどすべての大企業・大経営は、勤労人民大衆から巨額の利潤のみならず、超過利潤をも搾取・収奪するための機構となつています。そこで役立てられる経営技術は、もっぱら、その巨額の利潤・超過利潤の搾取・収奪のためのものですし、さらに、生産的大企業にあつては、人間搾取材料をとことんまで搾りつくし、その人間労働力の不具化から損傷・破壊までもおしすすめるための指揮・監督・監視を最大限に活用する文字どおりの「絶望工場」が、文化的装いをこらして、私たちの目をくらましています。この現実を前にして、「マルクス経済学者」と自称する先生方が、「科学としての経営学」などというキヤッチ・フレーズをさかんにふりまっていますが、いったい、その「経営」とは、どんな経営を指しているのでしょ

うか？ 巨大独占資本の経営する企業で、いったい、そのこたえられない巨額の利潤を確保するために万全の管理体制を施しているときに、そこで適用される「科学」とは、いったい、どんな種類の科学でありうるでしようか？

マルクスのうちたてた科学は、私たちに、世紀的名著『資本論』のなかで、つぎのことを明示してくれています。

「資本主義的体制のもとでは労働の社会的生産力を高くするための方法はすべて個々の労働者の犠牲において行われるということ、生産の発展のための手段は、すべて生産者を支配し搾取するための手段に一変し、労働者を不具にして部分人間となし、彼を機械の付属物に引き下げ、彼の労働の苦痛で労働の内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体するにつれて労働過程の精神的な諸力を彼から疎外するということ、これらの手段は彼が労働するための諸条件を歪め、労働過程では彼を狭量陰険きわまる専制に服従させ、彼の生活時間を労働時間にしてしまい、彼の妻子を資本のジャガノート車の下に投げこむということ、これらのことをわれわれは知ったのである」(前出、八四〇ページ、ゴシック体―山本)。

ここにかかげたのは、『資本論』第一巻のうちのもっとも重要な、いわば精髓ともいうべきくだりです。マルクス経済学を真剣に学びとろうと志すほどの者でしたら、誰ひとり知らないものはないところです。いったい、この精確な特徴づけのうちどのどこに、「経営の科学」が見出されるでしようか？ いったい、そこでは、どんな性質の「経営管理」がありうるでしようか？

八 社会主義的生産形態としての協業

資本主義的生産が協業という生産形態を採らなければ存立することがまったくできないのと同様に、社会主義的生

産も、協業という生産形態によらなければ一日たりとも存続できないものだ、ということ、およそ社会主義社会について初歩的知識をもっているほどのひとであれば、容易に理解できるところであろうと、私は考えます。ただし、このまったく相反する関係にある資本主義社会と社会主義社会とは、同じく協業とはいっても、その内容が本質的に違っていることは、付け加えるまでもないところです。簡単にいえば、資本主義社会での協業は、資本によってとことんまで搾りつくされる搾取材料としての賃銀奴隷の、食わんがための、強制された結合労働ですし、社会主義社会での協業は、社会の主人公と成った労働者たち自身の自発的な、自由な結合労働であります。

この「八」の表題を「社会主義的生産形態」としたについては、やはり説明をしておく必要があります。というのは、同じく社会主義的生産形態といっても、共産主義社会のそれと、共産主義社会以前の、資本主義から共産主義社会への移行の過程にある社会、つまり狭義の過渡期社会のそれとの、二つがあると、私は考えるからです。ここで共産主義社会というのは、共産主義社会の高い段階も、その低い、第一段階、つまりレーニン以来社会主義社会と呼ばれているものも、その二つともふくんでいるものです。

共産主義社会が労働者を主人公とするもつとも発展した協業を基本としていることは、たとえば『資本論』第一巻第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」の中の、

「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して、一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体」（前出、一〇五ページ、傍点―山本）

という言葉や、また、マルクスの労作『ゴータ綱領批判』の中の、

「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会」（マルクス・エンゲルス全集、第一九巻、邦訳大月版、一九ページ）

という言葉によっても明示されているところで、あえて解説の必要はないと思いますが、やはり、私たちにとって、現在重要な意義をもっているのは、過渡期における協業の問題であります。というのは、それ以前の資本主義社会において、すべての生産分野において発展した資本主義的協業、つまり機械大工業が支配的になっていけば、社会主義革命によってこれを社会主義的形態のものに根本的に変革することによって共産主義社会の第一段階への移行のために必要な労働組織も、また高い生産力も、比較的容易につくりだすことができるはずですが、そのような条件の欠けている場合、つまり、個別的生産者による小規模生産がまだ広範に残存している資本主義社会が社会主義革命によって資本主義的生産関係を根本的に変革して過渡期の段階に入ったときには、まず必要な協業形態を整えるということが当面の課題に、しかも簡単には解決されえない課題として出てくるからです。このようなところでは、労働力の担い手である直接的生産者は、小生産者特有の個人主義的・利己主義的観念を強固に身につけていて、結合労働力の一分子として共同的生产にはいることに強い抵抗を示すのが通例となっています。とくに農民階級は、小所有者としての観念を捨てることはけっして容易ではなく、そのためにきわめて長期にわたる適切な指導・説得および援助が必要となります。現在、「社会主義」国と称されるソ連および中国が、過渡期半ばで停滞しているかにみえるひとつの大きな理由は、尨大な農民大衆を高い社会主義的意識をもった大工業労働者の水準に引き上げ、同じように発展した社会主義的協業形態をつくりだしてこれを一般化することがきわめて困難となっている、ということにある、と私は推察しています。社会主義的協業形態が支配的にならなければ、解放された働き手の間に社会的接触による競争心や活力の独特な刺激も、したがって社会主義的意識の昂揚もありえないのであって、資本主義を上回る生産力水準の達成はおろか、資本主義の後塵を拝する低位水準に低迷せざるをえないことになるのは理の当然、と私には考えられるの

です。社会主義的協業がどれだけ普及し、どれだけ働き手が結合労働の担い手として活躍することができるか——ここに、過渡期の将来がかかっている、と言ってもけっして過言ではないと思います。

ま と め

人間労働力の担い手であり、その労働力を流動させて社会を支えている者こそが真に人間の名に値するものであることは、いまさら言うまでもないところで、その労働力の担い手たちが、他人との計画的な協働のなかで、はじめ彼の個体的な限界を脱け出て彼の種属能力を発揮するものだということも、すでに私たちの学んでいるところです。

しかし、そのような種属能力をはじめて発揮することのできる協業でありながら、それが、資本によって、搾取材料である賃銀奴隷から最大限の剰余価値を搾り出すためのたんなる方法にさせられるときには、そこにつくりだされる高い生産力の主体である労働力の担い手が、どのような状態におとしいられるかということ、マルクスが、『資本論』のなかで精確・刻明に解き明かしているところ、その一部分はさきはこの小論の「七」に引用してかかげたところです。右の引用箇所について説明されている資本主義的蓄積の一般的法則——「一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積」（前出、八四〇ページ）——も、資本主義的企業「経営における協業形態を考察するときには、けっして見落としてはならないところです。

では、これにたいして、共産主義社会での協業の本質はどんなものか、ということ、エンゲルスの『反デュールング論』によって見てみましょう。

「社会が生産手段を掌握するとともに、商品生産は廃止され、それとともに生産者にたいする生産物の支配が廃止される。社会的生産内部の無政府状態に代わって、計画的・意識的な組織が現われる。個人間の生存闘争は終わりを告げる。これによってはじめ、人間は、ある意味で決定的に動物界から分離し、動物的な生存条件からぬけだして、ほんとうに人間的な生存条件のなかに踏み入る。いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。……これまでは、人間自身の社会的結合が、自然と歴史とによって押しつけられたものとして、人間に対立してきたのであるが、いまやそれは、人間自身の自由な行為となる」(前出、二九二ページ)。

「緩和された徒刑場(*des bagnes mitigées*)」(フリーエ)の中での賃銀奴隷の協業という、文字どおりの資本主義的煉獄、そして、この煉獄をくぐりぬけなければそこには辿りつくことのできない、解放された自由な人々の自発的・計画的な協業、——この、類的人間の証あかしである協業の歴史的運命さだめの、なんとめまぐるしくもまた苛烈さだめきわまるものであることでしょうか！

(一九八六・四・二)